3月30日朝、桜ケ丘店では本格的な営業再開に向け、棚割変更とプライスカードの張り替えが行なわれた。

通常に近い営業再開は、「ふだんのくらし」が一歩ずつ戻ってきている証し

みやぎ生協　桜ケ丘店、明石台店

震災から3週間目となる4月1日（金）、
みやぎ生協では全48店舗中36店舗で
朝10時～夜21時までの営業を再開している※。
まだ品薄な商品も多いが、職員たちの表情は明るい。
通常営業に近づけることは、
メンバーの「ふだんのくらし」を支えることに
他ならないからだ。

組合員さんの感謝と励ましの声を受けて

震災直後、みやぎ生協の店舗は本部との連絡が途絶えた。しかし、供給が可能な店舗では、現場の判断で店頭販売を開始している。その後、店内の安全が確認された後は、店内の一部を利用した販売で、できる限り供給を続けたという。店舗運営部が震災後12日目から発行している「感謝の声ニュース」には、メンバー（組合員）からいただいた声が数多く掲載されている。

「被災翌日からずっと営業し続けてくれて本当にありがたい。さすが生協さんだね！　最近は品数も増えてきてお魚やお肉まで買えるようになった。この辺では生協さんが一番豊富で大助かりです・高砂店」（3／25第3号）、「生協さんが店を開けてくれていなかったらどうなっていたことでしょう。他の店が閉めている中、営業を続けてくれて本当にありがとうございます・富沢店（泣きながらの電話）」（3／29第7号）。

こうしたメンバーの感謝と励ましの声を受けて、店舗職員は4月1日からの通常に近い営業再開に向けて、一丸となって営業を続けていた。

入荷が不安定な中臨機応変に対応する

▼3月29日（火）・桜ケ丘店

朝8時。震災5日目から店内で営業している桜ケ丘店（仙台市青葉区）では、通常に近い営業再開に向けての準備が進められていた。パート職員たちは、ホコリをかぶった仕切り板を拭き直し、プライスカード（値札）の張り替えのため、棚にテキパキと棚割表を止めて回っていた。

ところが作業開始後、本部から発注できない商品のリストが送られてきたため、ドライ担当の千葉春美（ちばはるみ）さんは、早速、該当するプライスカードを全部裏返すよう指示を出していた。

「今は、商品がいつ入荷するかも分からな

桜ケ丘店
ドライ担当　千葉春美さん
「震災当日、雪の降る中で店頭販売し、メンバーさんが欲しいという商品を停電で真っ暗な店内に探しに行きました。通常に近い営業に戻ってうれしいです」

※　津波の被害を受けた6店舗を除き、その他に2店舗が夕18時まで、4店舗では商品がなくなり次第終了での店頭販売となっている。

桜ケ丘店
副店長　武田美穂さん
「営業支援いただいた他生協の皆さんには、寒い中でのお客さまの誘導や掃除など、本当に助けられました。きちんと言葉にしてお礼をお伝えできなかったのが心残りです。ありがとうございました」

い状況なので、臨機応変に対応していかなければなりません」と千葉さん。また、副店長の武田美穂さんは、

「本来、春の新商品が並ぶ時期なのですが、品薄状態が続いています。それを埋めるため、これまで扱いのなかった商品が増えています。値札付けやレジ設定などで大変ですが、メンバーさんの要望の多い商品は本部でそろえてくれるので、それをきちんと供給していきます」と話す。

一方、開店準備作業も着々と進んでいく。ガラガラの棚には本部からの送り込みで入荷した商品が並べられていく。平時と違うのは、どの商品がどれだけ届くか分からないことだという。平台をどうつくるか、棚をどう埋めていくか、即座の判断が続く。

「冷凍食品入ったよー！」「カップ麺、今日は25ケース！」など、店内には次々と商品の入荷を知らせる声が響く。「漬物など、通常より多く入荷しています。ここ1週間で品ぞろえも充実してきました」とパート職員も喜びの声を上げた。なお、この日は、カップ麺や入荷量の少ない納豆、油揚げ、ヨーグルトなどを購入数量制限することが決まった。

9時45分からレジ担当のミーティングが行なわれた。いつもより早い集合時間だというが、これは数量制限などの伝達事項が多く、組合員が入店する前に全員で店内を一通り見て回るためだという。

震災前に近い品ぞろえが戻ってきたパン売場（上）と品薄ながらも人気の納豆が陳列された日配売場。開店と同時に、次から次へとメンバーの手が伸び、職員は品出しに追われていた。

いよいよ通常に近い営業再開へ
▼4月1日（金）・明石台店

明石台店（富谷町）では朝6時ごろから正規職員やパート職員が出勤し、続々と入荷する商品の入荷と品出しに追われた。普通なら部門ごとに進める品出しだが、部門横断での作業となった。

「何時に入るか分からないので、入荷した順から店内に運び、手が空いた人がすぐ手伝いに入るようにしたんです」と店長の菊地良久さん。大量の商品を積んだカゴ車や冷蔵コンテナが所狭しと並び、「発注した分が全部入ってきた！」などの声も上がり、店内は活気に満ちていた。

10時開店。乳製品など、まだ空いている棚はあるものの、新鮮な野菜や魚、肉がぎっしり並び、メンバーも落ち着いて買い物をしていた。明石台店の近くに住むというメンバーは、「今日から営業再開なのね。商品がいっぱいあるのを見ると、希望が見えてきた感じがするわ」と喜んでいた。

通常に近い形での営業再開は、一歩ずつ「ふだんのくらし」が戻ってきている何よりの証し。みやぎ生協の店舗の復興は着々と進みつつある。

（文・写真　早坂恵美）

明石台店
店長　菊地良久さん
「今回の震災では全国の生協から支援をいただきました。メンバーさんから“他のスーパーより商品多いね”と言われたのも全国からの応援があったからこそだと思っています。本当にありがとうございます」

4月1日、開店直後の明石台店。品ぞろえと彩りを取り戻した売場には大勢のメンバーの姿があった。